表 8- 2　年齢分布

年齢	N	%
0 歳	43	71.7
1 歳	11	18.3
2 歳	2	3.3
3 歳	1	1.7
4 歳	2	3.3
6 歳	1	1.7
合計	60	100

3.乳幼児の「重症度・看護必要度」基準による A 得点の特徴

「重症度・看護必要度」基準によるA得点は、医療処置の多さを明らかにする得点である。このA得点は、平均値が 0.2 点でかなり低かった。施設別では N 乳児院で 0.1 点、O 乳児院では 0.4 点であり、どちらも 1 点に満たない状態であり、医療処理は少なかった。

表 8- 3　「重症度・看護必要度」基準によるA得点（医療の処置）

A 得点	平均値	標準偏差	最小値	最大値	N
O 乳児院	0.1	0.4	0	2	354
N 乳児院	0.4	0.6	0	2	317
全体	0.2	0.5	0	2	671

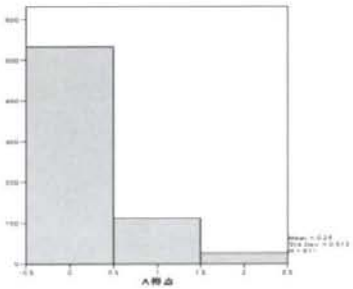

図 8- 2　A得点分布

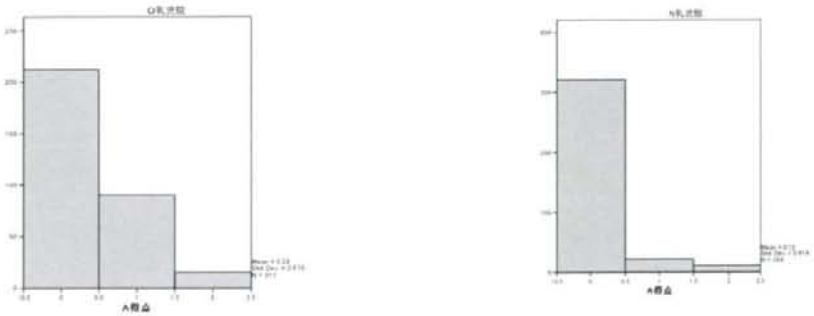

図 8- 3　N 乳児院及び O 乳児院の A 得点の分布

4.乳幼児の「重症度・看護必要度」基準におけるB得点の特徴

B得点は、日常生活の自立度を数量化したものであることから、0歳の乳幼児においては、全体の平均値が14.1点で、N乳児院で14.0点、O乳児院では14.3点であり、どちらの施設でも極めて高い14点以上という得点が示されていた。

表8－4　乳幼児のB得点（日常生活の自立度）

B得点	平均値	標準偏差	最小値	最大値	N
N乳児院	14.0	3.1	9	19	354
O乳児院	14.3	2.3	10	18	317
合計	14.1	2.8	9	19	671

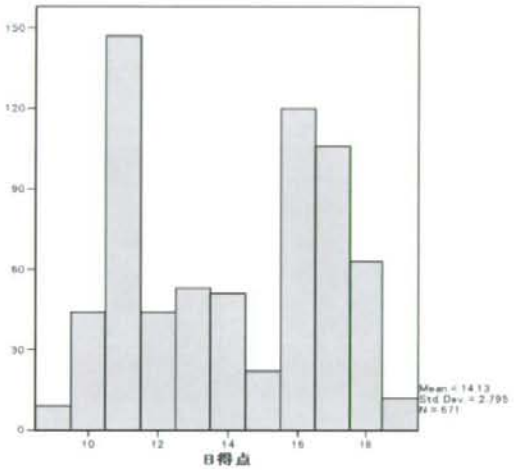

図8－4　B得点分布

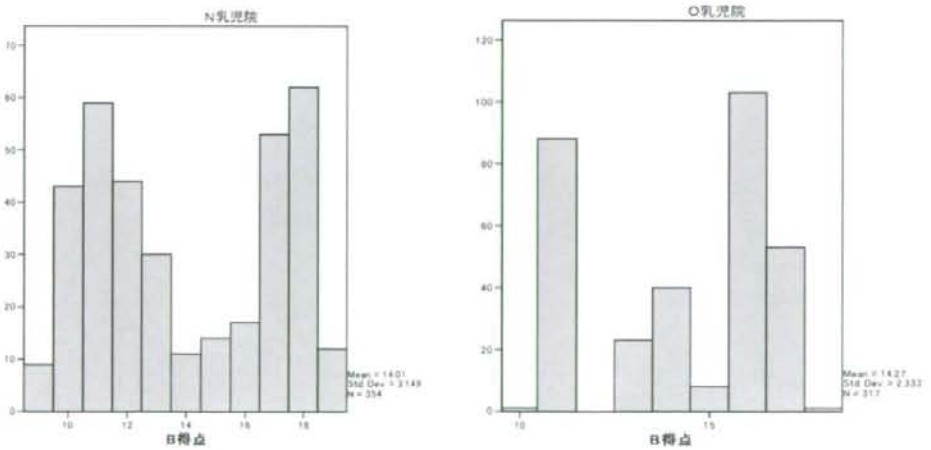

図8－5　N乳児院及びO乳児院のB得点の分布

5.患者分類による乳幼児の分類

N 乳児院では、タイプ 3 が 34 名（9.6%）、タイプ 4 が 121 名（34.2%）、タイプ 5 が 199 名（56.2%）で、タイプ 5 が最も多かった。同様に、O 乳児院では、タイプ 3 が 1 名（0.3%）、タイプ 4 が 88（27.8%）、タイプ 5 が 228 名で（71.9%）の割合で存在し、O 乳児院のほうが N 乳児院よりも、タイプ 5 の割合は高かった。

両施設ともに特定集中治療室やハイケアユニットの患者と同様の状態像をもった乳幼児が 9 割以上、存在しており、多くのケアが必要であることが推察された。

表 8- 5　乳児院別患者分類別構成人数

	タイプ 3		タイプ 4		タイプ 5		合計	
	N	%	N	%	N	%	N	%
N 乳児院	34	9.6	121	34.2	199	56.2	354	100
O 乳児院	1	0.3	88	27.8	228	71.9	317	100
全体	35	5.2	209	31.1	427	63.6	671	100

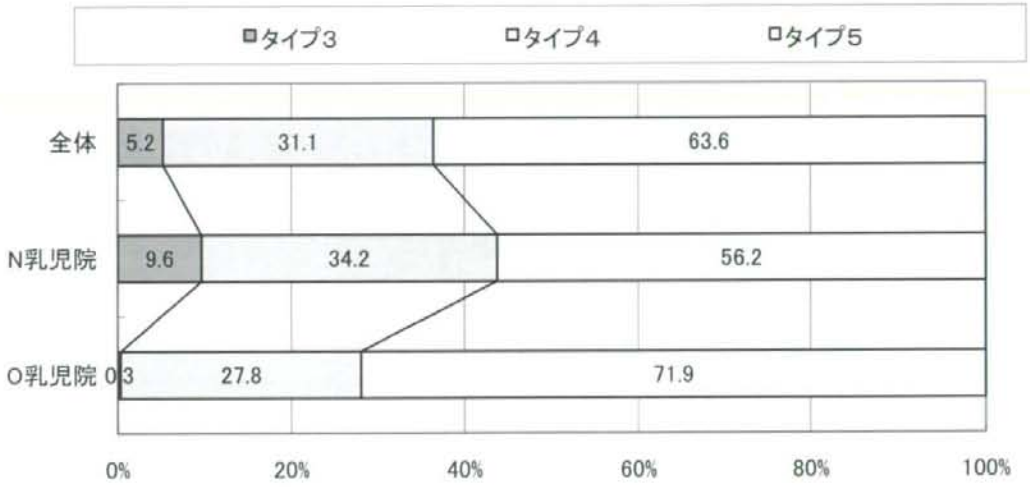

図 8- 6　乳児院別患者分類別構成人数

注１）患者分類

本調査対象に用いた患者分類は、すでに医療保険制度における診療報酬において、特定集中治療室（ICU）やハイケアユニット（HCU）の入院管理料の算定の届け出に際して義務付けられる患者評価の得点表を利用した分類のことをいう。

患者分類は、ICU に相応しいの患者のスクリーニングをするための「重症度」基準とハイケアユニットに相応しいのスクリーニングをするため「重症度・看護必要度」基準の２つの指標を用いて、患者の状態像を簡便に把握し、分類するために開発された。

この分類は、以下のフローチャートに基づいて５つに分類される。

まず、「重症度」基準と「重症度・看護必要度」基準の両方を満たす患者を“タイプ５”,「重症度」基準を満たすが「重症度・看護必要度」基準を満たさない患者を“タイプ４”, ICU 基準は満たさないが HCU 基準を満たす患者を“タイプ３”,「重症度」基準と「重症度・看護必要度」基準のいずれも満たさない患者で、A または B 得点のいずれかが１点以上の場合、“タイプ２”とし、それ以外のもっとも軽い状態像の患者を“タイプ１”としている。これまでの研究から、患者の重症度を示す段階としての臨床的に利用が進められており、タイプ５・４は ICU レベル，レベル３が HCU レベル，レベル２・１を一般患者レベルとしている。

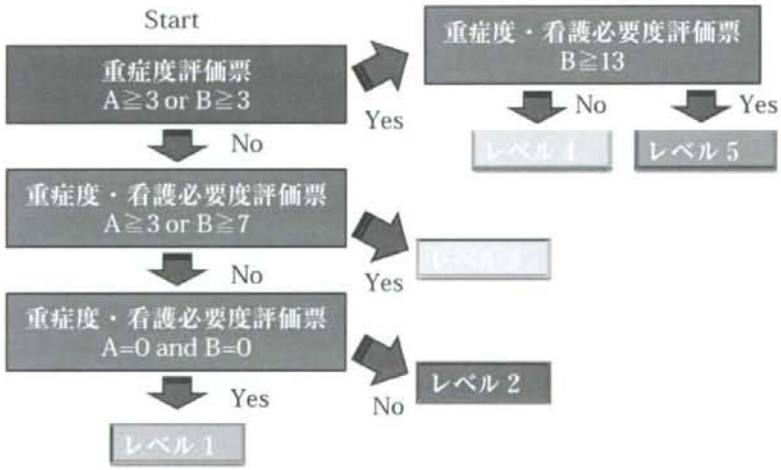

図　患者分類のフローチャート

上記のフローチャートを用いて、患者を１ー5 に分類する際の具体的な A および B の得点は以下の通りである。

まず、患者タイプ５は、「重症度・看護必要度」B 得点１３点以上、かつ「重症度」A 得点３点以上，B 得点が５点以下である。

患者タイプ４は、「重症度」でA得点３点以上，B得点が５点以下

患者タイプ３は、「重症度・看護必要度」でA得点３点以上またはB得点７点以上

患者タイプ２は、「重症度・看護必要度」でA得点１点以上またはB得点１点以上

患者タイプ１　は上記以外の得点のものをいう。

すでに、急性期病棟の一般病棟においては、レベル２の割合が５割程度を占める病院が多いことがわかっている。（筒井孝子「診療報酬における「看護必要度」利用の意義と今後の課題」看護展望 2008;33(5):460.）

第9章　乳幼児の状態　－「重症度・看護必要度」の評価項目における回答傾向－

1.乳幼児に提供された医療的な処置（「重症度・看護必要度」A項目の評価結果）

①創傷処置

創傷処置について、全体では、「なし」が648名（96.6%）、「あり」が23名（3.4%）、タイプ3では、「なし」が35名（100%）、「あり」が0名（0%）、タイプ4では、「なし」が202名（96.7%）、「あり」が7名（3.3%）、タイプ5では、「なし」が411名（96.3%）、「あり」が16名（3.7%）であった。

いずれのタイプにおいても創傷処置は、ほとんど発生していなかった。

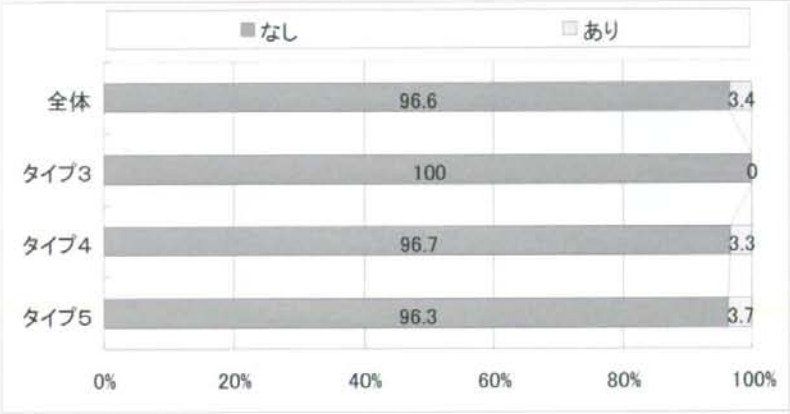

図9－1　創傷処置

②蘇生術の施行

蘇生術の施行について、全体では、「なし」が671名（100%）、タイプ3では、「なし」が35名（100%）、タイプ4では、「なし」が209名（100%）、タイプ5では、「なし」が427名（100%）で、すべてのタイプにおいて蘇生術は行われていなかった。

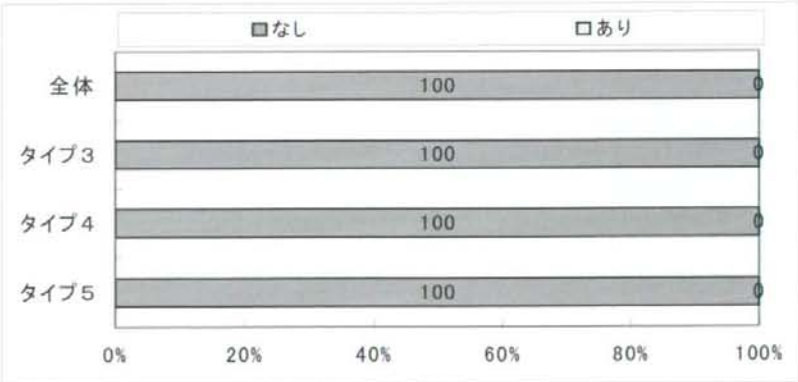

図9－2　蘇生術の施行

③血圧測定

全体では、「0 回」が 671 名（100%）、タイプ 3 では、「0 回」が 35 名（100%）、タイプ 4 では、「0 回」が 209 名（100%）、タイプ 5 では、「0 回」が 427 名（100%）で、血圧測定もまったく行われていなかった。

④時間尿測定

全体では、「なし」が 642 名（95.7%）、「あり」が 29 名（4.3%）、タイプ 3 では、「なし」が 35 名（100%）、「あり」が 0 名（0%）、タイプ 4 では、「なし」が 208 名（99.5%）、「あり」が 1 名（0.5%）、タイプ 5 では、「なし」が 399 名（93.4%）、「あり」が 28 名（6.6%）であった。タイプ 4 と 5 以外では、まったく時間尿測定は行われていなかった。

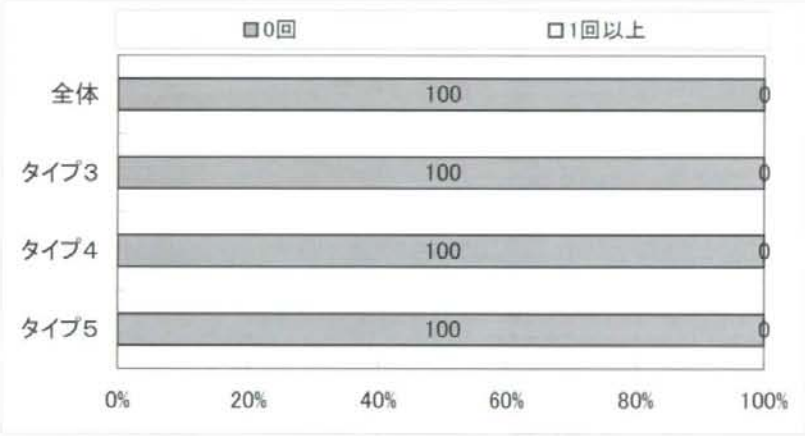

図 9-3　血圧測定、時間尿測定

⑤ 呼吸ケア

呼吸ケアについて、全体では、「なし」が 561 名（83.6%）、「あり」が 110 名（16.4%）、タイプ 3 では、「なし」が 34 名（97.1%）、「あり」が 1 名（2.9%）、タイプ 4 では、「なし」が 174 名（83.3%）、「あり」が 35 名（16.7%）、タイプ 5 では、「なし」が 353 名（82.7%）、「あり」が 74 名（17.3%）であった。呼吸ケアは、タイプ 4 と 5 に 16%前後、行われていただけであった。

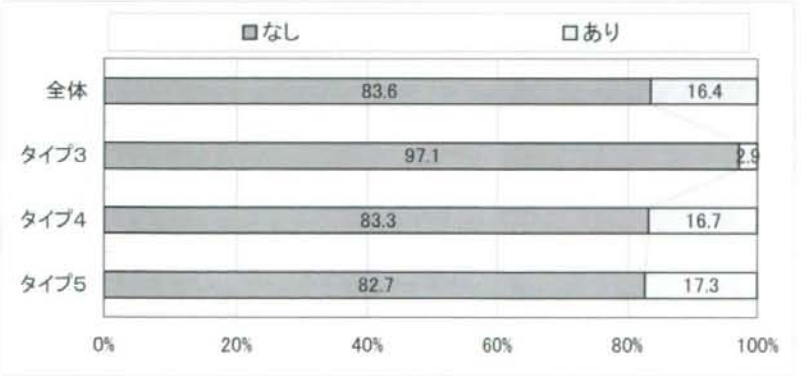

図 9- 4　呼吸ケア

⑥ 点滴ライン同時3本以上

点滴ライン同時3本以上は、全体では、「なし」が670名(99.9%)、「あり」が1名(0.1%)、タイプ3では、「なし」が35名（100%)、「あり」が0名（0%)、タイプ4では、「なし」が208名（99.5%)、「あり」が1名（0.5%)、タイプ5では、「なし」が427名（100%)、「あり」が0名（0%）で、点滴ラインが3本以上と示されたのは、タイプ4の1名だけであった。

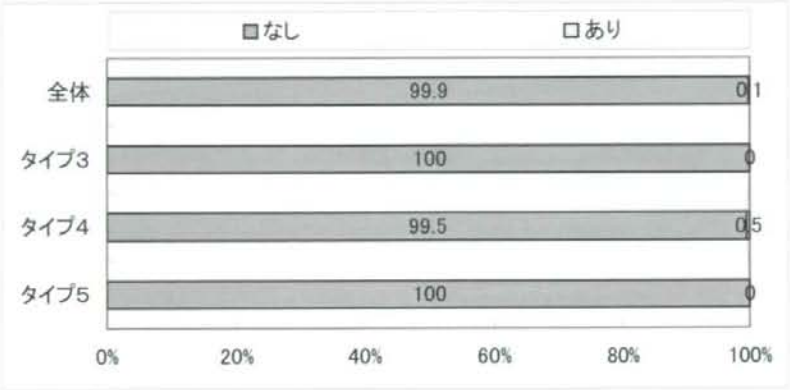

図9- 5　点滴ライン同時3本以上

⑦ 心電図モニター

全体では、「なし」が671名（100%)、タイプ3に、「なし」が35名（100%)、タイプ4では、「なし」が209名（100%)、タイプ5では、「なし」が427名（100%）で、まったく心電図モニターはついていなかった。

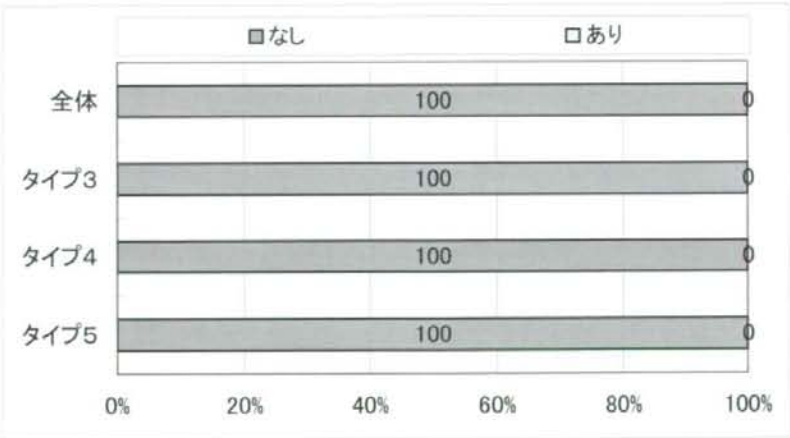

図9- 6　心電図モニター

⑧ 輸液ポンプの使用

全体では、「なし」が 670 名（99.9%）、「あり」が 1 名（0.1%）、タイプ 3 では、「なし」が 35 名（100%）、「あり」が 0 名（0%）、タイプ 4 では、「なし」が 209 名（100%）、「あり」が 0 名（0%）、タイプ 5 では、「なし」が 426 名（99.8%）、「あり」が 1 名（0.2%）であった。タイプ 3 と 5 に輸液ポンプを使っているものがわずかにいるだけであった。

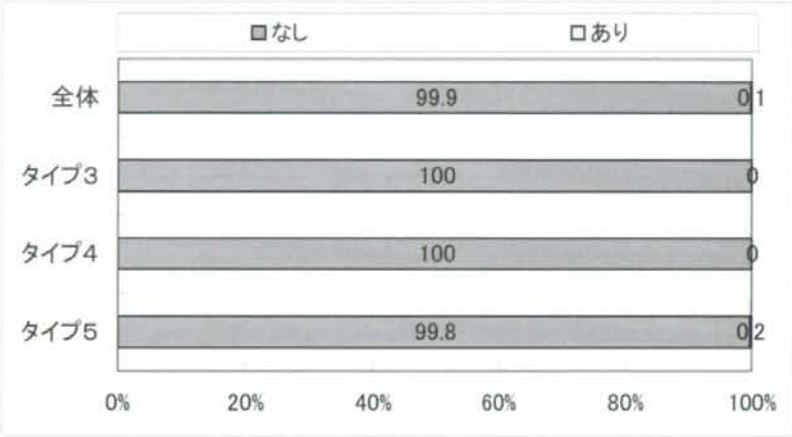

図 9- 7　輸液ポンプの使用

⑨ 動脈圧測定

動脈圧測定について、全体では、「なし」が 671 名（100%）、タイプ 3 では、「なし」が 35 名（100%）、タイプ 4 では、「なし」が 209 名（100%）、タイプ 5 では、「なし」が 427 名（100%）であった。これは、すべての乳幼児に行われていなかった。

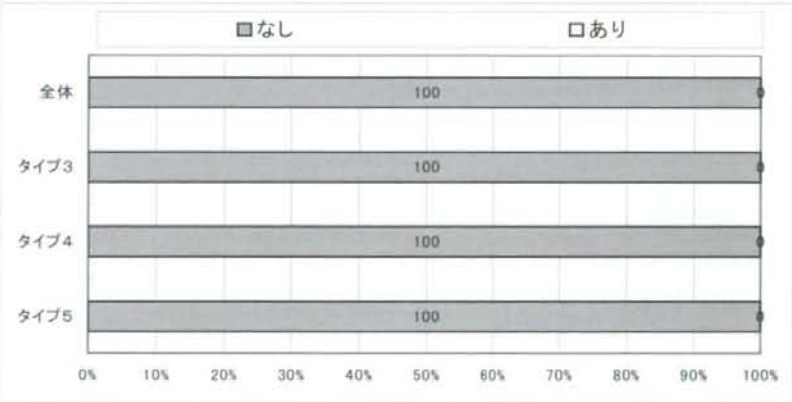

図 9- 8　動脈圧測定

⑩ シリンジポンプの使用

シリンジポンプの使用について、全体では、「なし」が 671 名（100%）、タイプ 3 では、「なし」が 35 名（100%）、タイプ 4 では、「なし」が 209 名（100%）、タイプ 5 では、「なし」が 427 名（100%）ですべての乳幼児に行われていなかった。

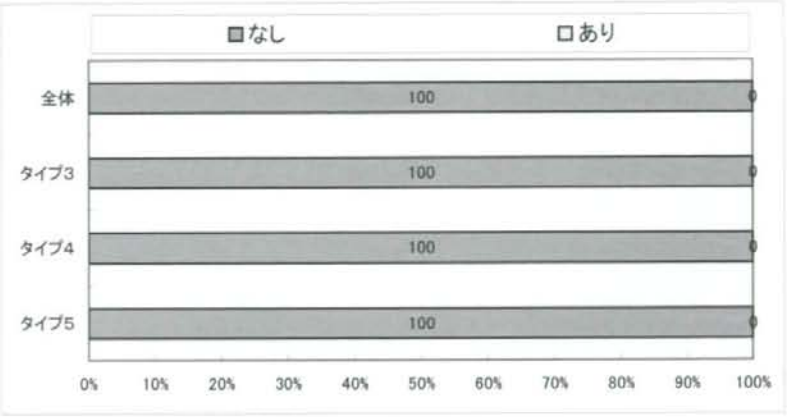

図 9－ 9　シリンジポンプの使用

⑪ 中心静脈圧測定

中心静脈圧測定について、全体では、「なし」が 671 名（100%）、タイプ 3 では、「なし」が 35 名（100%）、タイプ 4 では、「なし」が 209 名（100%）、タイプ 5 では、「なし」が 427 名（100%）で、すべての乳幼児に行われていなかった。

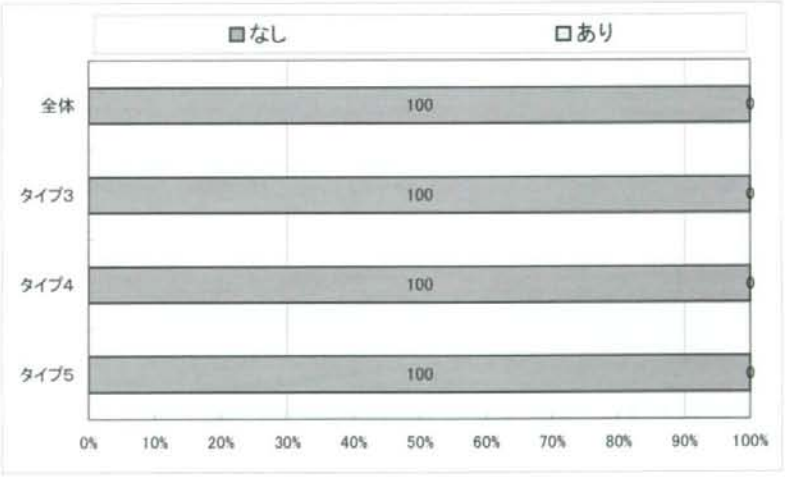

図 9－ 10　中心静脈圧測定

⑫ 人工呼吸器の装着

全体で、「なし」が 671 名（100%）、タイプ 3 では、「なし」が 35 名（100%）、タイプ 4 では、「なし」が 209 名（100%）、タイプ 5 では、「なし」が 427 名（100%）で、すべての乳幼児に行われていなかった。

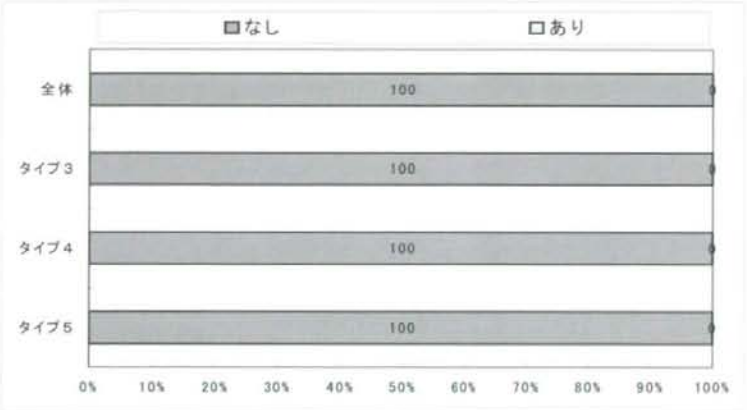

図 9- 11　人工呼吸器の装着

⑬ 輸血又は血液製剤の使用

輸血又は血液製剤の使用について、全体では、「なし」が 671 名（100%）、タイプ 3 では、「なし」が 35 名（100%）、タイプ 4 では、「なし」が 209 名（100%）、タイプ 5 では、「なし」が 427 名（100%）で、すべての乳幼児に行われていなかった。

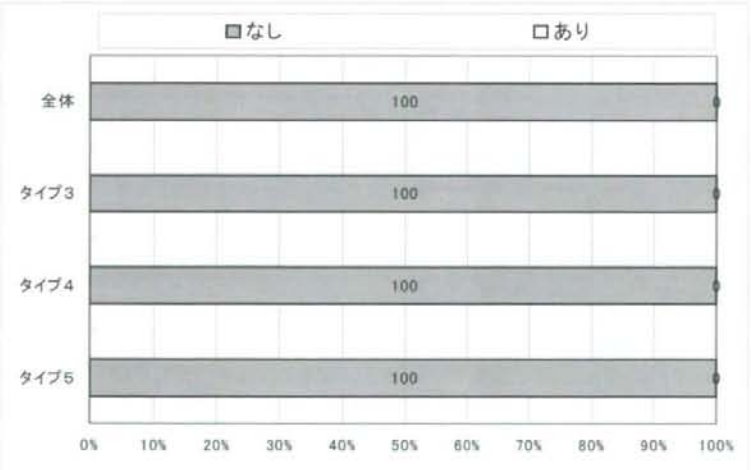

図 9- 12　輸血又は血液製剤の使用

⑭ 肺動脈圧測定

肺動脈圧測定について、全体では、「なし」が 671 名（100%）、タイプ 3 では、「なし」が 35 名（100%）、タイプ 4 では、「なし」が 209 名（100%）、タイプ 5 では、「なし」が 427 名（100%）で、すべての乳幼児に行われていなかった。

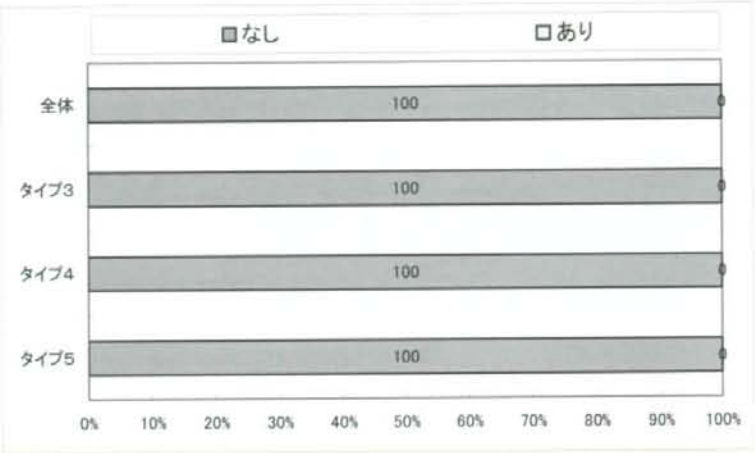

図 9- 13　肺動脈圧測定

⑮ 特殊な治療法

特殊な治療法は、全体では、「なし」が 671 名（100%）、タイプ 3 では、「なし」が 35 名（100%）、タイプ 4 では、「なし」が 209 名（100%）、タイプ 5 では、「なし」が 427 名（100%）ですべての乳幼児に行われていなかった。

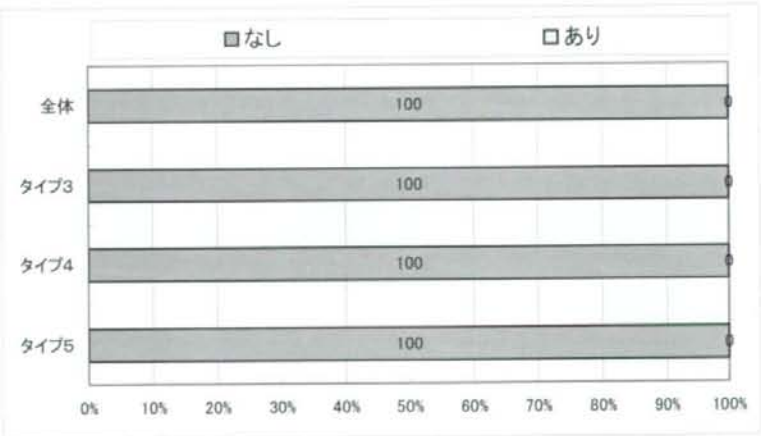

図 9- 14　特殊な治療法

2.乳幼児の日常生活の自立度に係る評価（「重症度・看護必要度」B 項目の評価結果）

①床上安静の指示

床上安静の指示について、全体では、「なし」が 670 名（99.9%）、「あり」が 1 名（0.1%）、タイプ 3 では、「なし」が 35 名（100%）、「あり」が 0 名（0%）、タイプ 4 では、「なし」が 209 名（100%）、「あり」が 0 名（0%）、タイプ 5 では、「なし」が 426 名（99.8%）、「あり」が 1 名（0.2%）であった。タイプ 5 に 1 名だけ、床上安静の指示が出されていた。

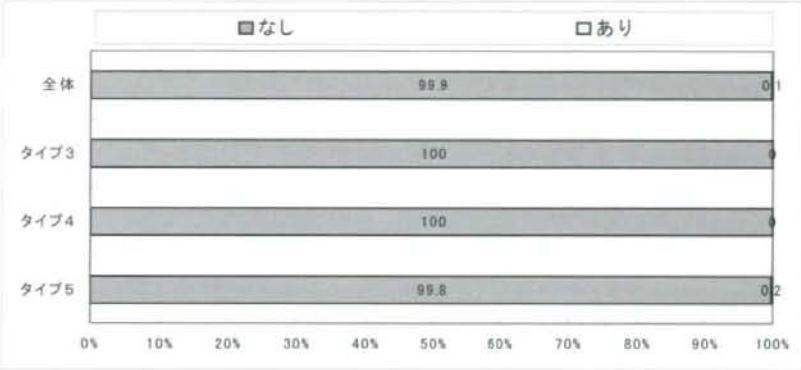

図 9- 15　床上安静の指示

②どちらかの手を胸元まであげる

「どちらかの手を胸元まであげる」について、全体では、「できる」が 602 名（89.7%）、「できない」が 69 名（10.3%）、タイプ 3 では、「できる」が 35 名（100%）、「できない」が 0 名（0%）、タイプ 4 では、「できる」が 209 名（100%）、「できない」が 0 名（0%）、タイプ 5 では、「できる」が 358 名（83.8%）、「できない」が 69 名（16.2%）であった。

タイプ 5 でできない者がいたが、タイプ 3，4 では、できていた。

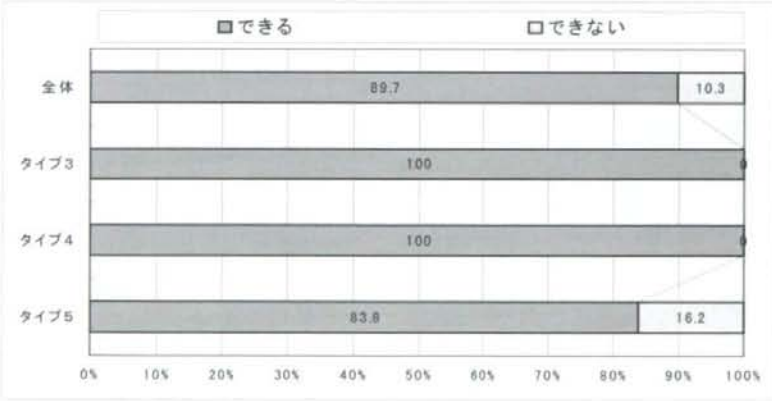

図 9- 16　どちらかの手を胸元まであげる

③寝返り

寝返りについては、全体では、「できる」が 370 名（55.1%）、「何かにつかまればできる」が 7 名（1.0%）、「できない」が 294 名（43.8%）、タイプ 3 では、「できる」が 35 名（100%）であった。「何かにつかまればできる」が 0 名（0%）、「できない」が 0 名（0%）、タイプ 4 では、「できる」が 207 名（99.0%）、「何かにつかまればできる」が 2 名（1.0%）、「できない」が 0 名（0%）、タイプ 5 では、「できる」が 128 名（30.0%）で、「何かにつかまればできる」が 5 名（1.2%）、「できない」が 294 名（68.9%）であった。

タイプ 5 となった乳幼児では、できるものがかなり、少なかった。

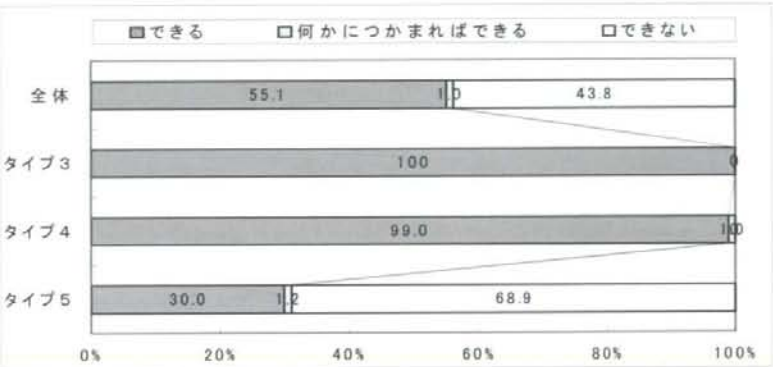

図 9－ 17　寝返り

④起き上がり

起き上がりについて、全体では、「できる」が 288 名（42.9%）、「できない」が 383 名（57.1%）、タイプ 3 では、「できる」が 35 名（100%）、「できない」が 0 名（0%）、タイプ 4 では、「できる」が 207 名（99.0%）、「できない」が 2 名（1.0%）、タイプ 5 では、「できる」が 46 名（10.8%）、「できない」が 381 名（89.2%）であった。

タイプ 5 では、1 割しか、できる乳幼児はいなかった。

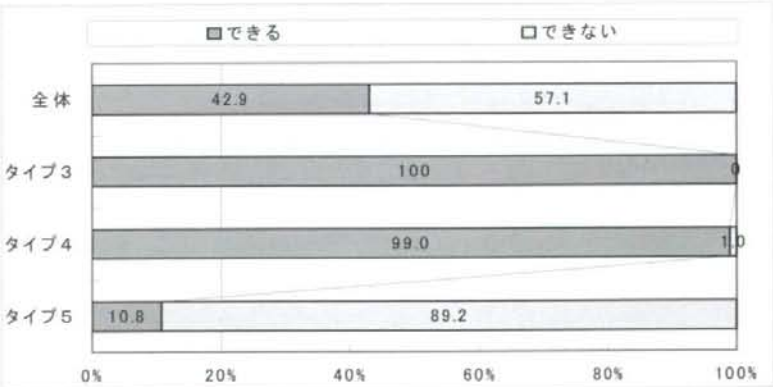

図 9－ 18　起き上がり

⑤座位保持

座位保持について、全体では、「できる」が 237 名（35.3%）、「支えがあればできる」が 59 名（8.8%）、「できない」が 375 名（55.9%）、タイプ 3 では、「できる」が 35 名（100%）、「支えがあればできる」が 0 名（0%）、「できない」が 0 名（0%）、タイプ 4 では、「できる」が 202 名（96.7%）、「支えがあればできる」が 7 名（3.3%）、「できない」が 0 名（0%）、タイプ 5 では、「できる」が 0 名（0%）、「支えがあればできる」が 52 名（12.2%）、「できない」が 375 名（87.8%）であった。自分で座位が確保できるのは、35.3%しかいなかった。

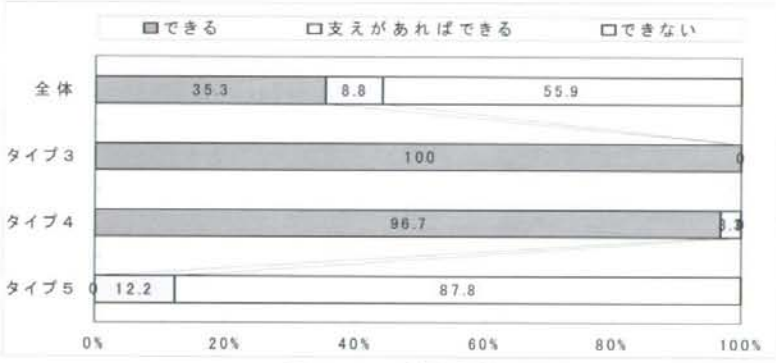

図 9- 19　座位保持

⑥移乗

移乗について、全体では、「見守り・一部介助が必要」が 43 名（6.4%）、「できない」が 628 名（93.6%）、タイプ 3 では、「見守り・一部介助が必要」が 35 名（100%）、「できない」が 0 名（0%）、タイプ 4 では、「見守り・一部介助が必要」が 4 名（1.9%）、「できない」が 205 名（98.1%）、タイプ 5 では、「見守り・一部介助が必要」が 4 名（0.9%）、「できない」が 423 名（99.1%）であった。移乗が自立しているものは、いなかったが、タイプ 3 になると何らかの援助によって、移乗ができていた。

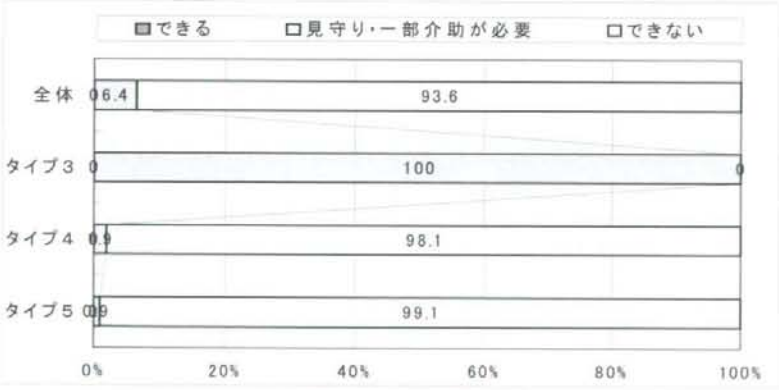

図 9- 20　移乗

⑦移動方法

移動方法について、全体では、「自立歩行・つかまり歩き」が1名（0.1%）、「補助を要する移動」が579名（86.3%）、「移動なし」が91名（13.6%）、タイプ3では、「自立歩行・つかまり歩き」が0名（0%）、「補助を要する移動」が35名（100%）、「移動なし」が0名（0%）、タイプ4では、「自立歩行・つかまり歩き」が1名（0.5%）、「補助を要する移動」が208名（99.5%）、「移動なし」が0名（0%）、タイプ5では、「自立歩行・つかまり歩き」が0名（0%）、「補助を要する移動」が336名（78.7%）、「移動なし」が91名（21.3%）であった。移動は、ほぼすべての乳幼児において、介助が必要であった。

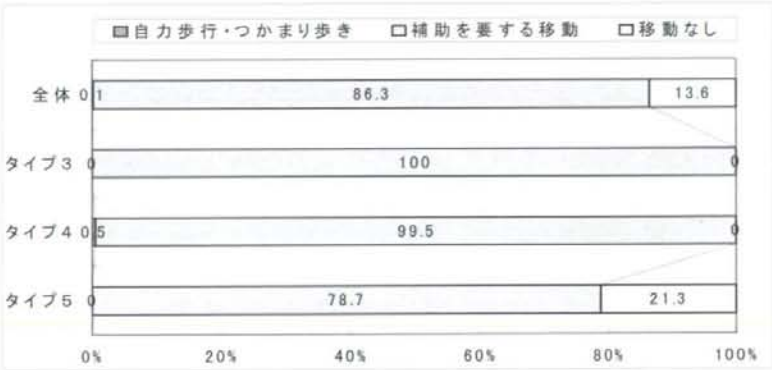

図9－21　移動方法

⑧口腔清潔

口腔清潔について、全体では、「できない」が671名（100%）、タイプ3では、「できない」が35名（100%）、タイプ4では、「できない」が209名（100%）、タイプ5では、「できない」が427名（100%）で、口腔清潔ができる児童は、いなかった。

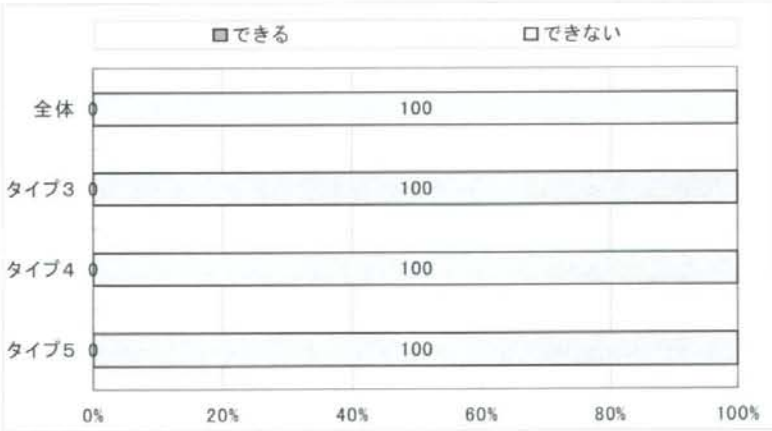

図9－22　口腔清潔

⑨食事摂取

食事摂取について、全体では、「一部介助」が 80 名(11.9%)、「全介助」が 591 名(88.1%)、タイプ 3 では、「一部介助」が 21 名（60.0%）、「全介助」が 14 名（40.0%）、タイプ 4 では、「一部介助」が 59 名（28.2%）、「全介助」が 150 名（71.8%）、タイプ 5 では、「一部介助」が 0 名（0%）、「全介助」が 427 名（100%）であった。食事が自立していたものは、いなかったが、一部介助が 1 割程度で、ほぼ 9 割が全介助となっていた。

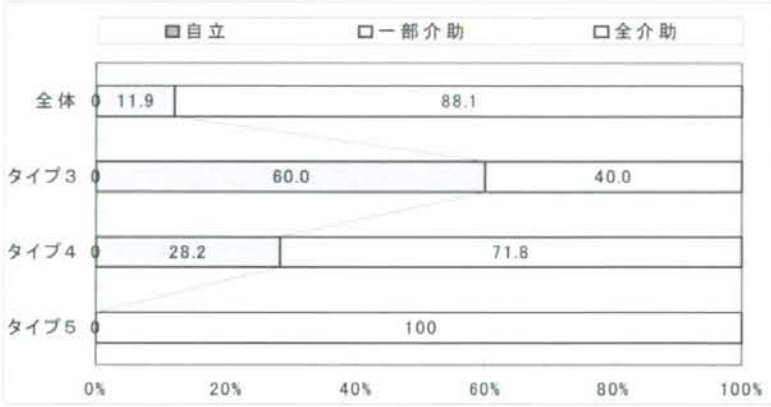

図 9- 23　食事摂取

⑩衣服の着脱

衣服の着脱について、全体では、「全介助」が 671 名（100%）、タイプ 3 では、「全介助」が 35 名（100%）、タイプ 4 では、「全介助」が 209 名（100%）、タイプ 5 では、「全介助」が 427 名（100%）で、すべて介助が必要であった。

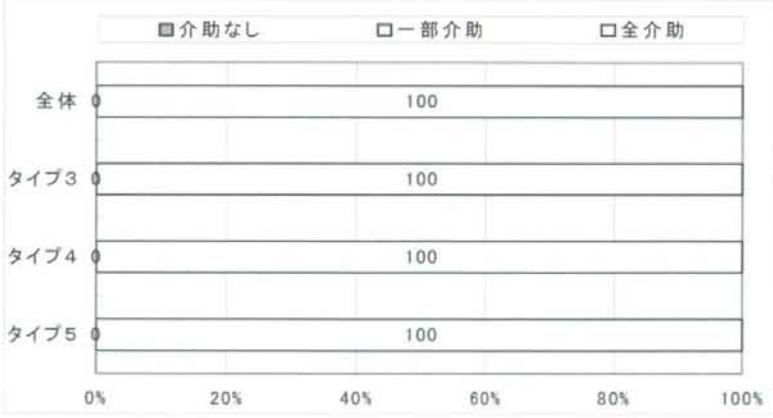

図 9- 24　衣服の着脱

⑪他者への意思の伝達

他者への意思の伝達について、全体では、「できる時とできない時がある」が 390 名（58.1%）、「できない」が 281 名（41.9%）、タイプ 3 では、「できる時とできない時がある」が 14 名（40.0%）、「できない」が 21 名（60.0%）、タイプ 4 では、「できる時とできない時がある」が 137 名（65.6%）、「できない」が 72 名（34.4%）、タイプ 5 では、「できる時とできない時がある」が 239 名（56.0%）、「できない」が 188 名（44.0%）であった。

全体としては 4 割は、できなかったが、6 割近くが出来る時と出来ない時があると回答され、意思の伝達は困難であることが示されていた。

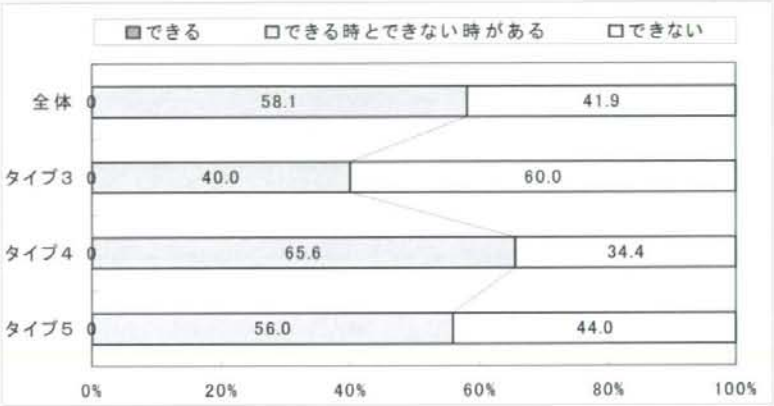

図 9－ 25　他者への意思の伝達

⑫診療・療養上の指示が通じる

診療・療養上の指示が通じるについて、全体では、「いいえ」が 671 名（100%）、タイプ 3 では、「いいえ」が 35 名（100%）、タイプ 4 では、「いいえ」が 209 名（100%）、タイプ 5 では、「いいえ」が 427 名（100%）で、診療・療養上の指示は全く通じていなかった。

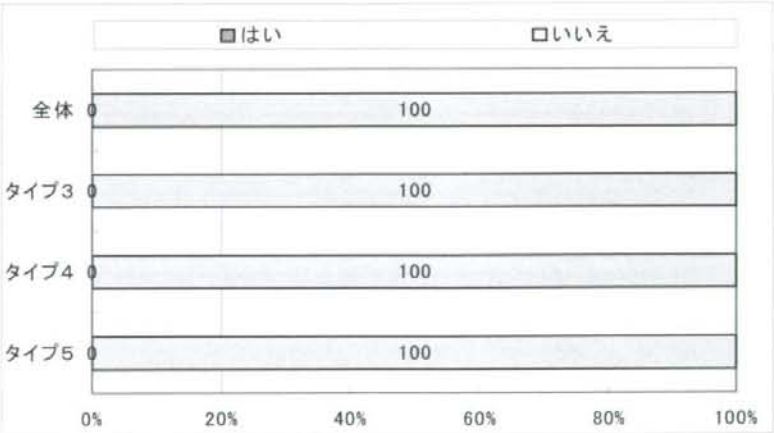

図 9－ 26　診療・療養上の指示が通じる

⑬危険行動への対応

危険行動への対応について、全体では、「ない」が 3 名(0.4%)、「ある」が 668 名(99.6%)、タイプ 3 では、「ない」が 0 名 (0%)、「ある」が 35 名 (100%)、タイプ 4 では、「ない」が 2 名 (1.0%)、「ある」が 207 名 (99.0%)、タイプ 5 では、「ない」が 1 名 (0.2%)、「ある」が 426 名 (99.8%) であった。危険行動の対応をすべての児童について実施している状況が示されていた。

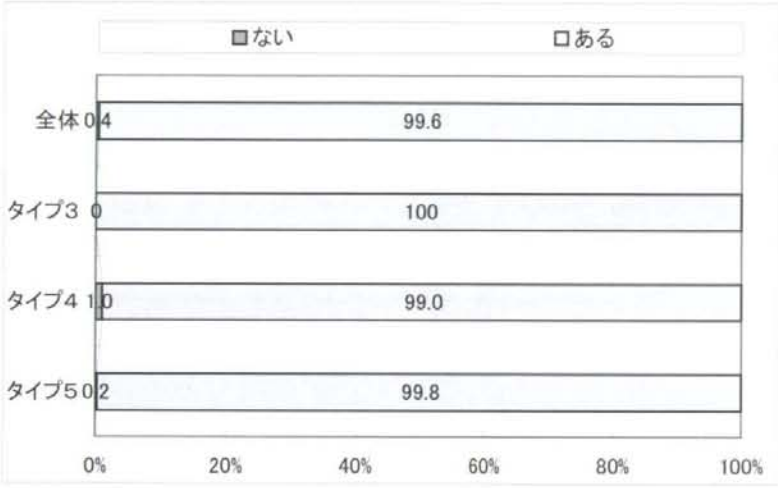

図 9- 27　危険行動への対応

⑭手術

手術について、全体では、「なし」が 671 名 (100%)、タイプ 3 では、「なし」が 35 名 (100%)、タイプ 4 では、「なし」が 209 名 (100%)、タイプ 5 では、「なし」が 427 名 (100%) で手術を受けた乳児はいなかった。

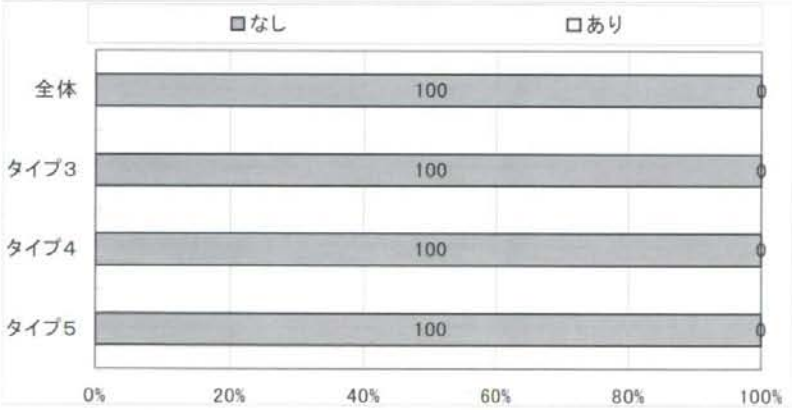

図 9- 28　手術

⑮10 分間以上の指導

10 分間以上の指導について、全体では、「なし」が 669 名(99.7%)、「あり」が 2 名(0.3%)、タイプ 3 では、「なし」が 35 名（100%)、「あり」が 0 名（0%)、タイプ 4 では、「なし」が 209 名（100%)、「あり」が 0 名（0%)、タイプ 5 では、「なし」が 425 名（99.5%)、「あり」が 2 名（0.5%）であった。指導をしたのは、2 名だけで、ほとんど行われていなかった。

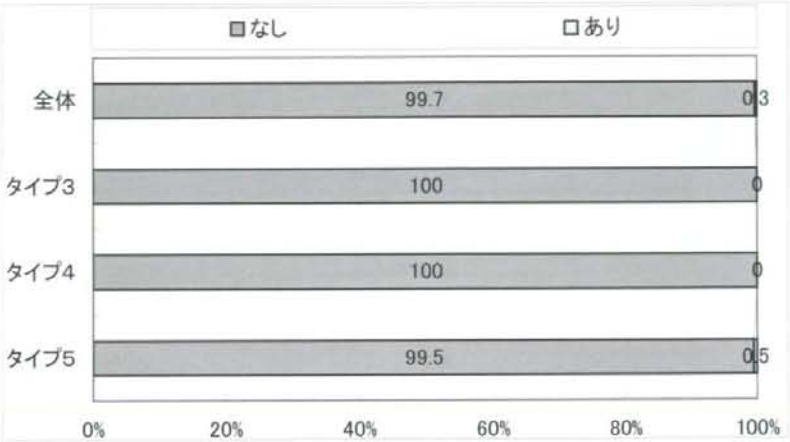

図 9- 29　10 分間以上の指導

⑯10 分間以上の意思決定支援

10 分間以上の意思決定支援について、全体では、「なし」が 671 名（100%)、タイプ 3 では、「なし」が 35 名（100%)、タイプ 4 では、「なし」が 209 名（100%)、タイプ 5 では、「なし」が 427 名（100%）で、こういった意思決定支援をできる対象ではなかったと推測された。

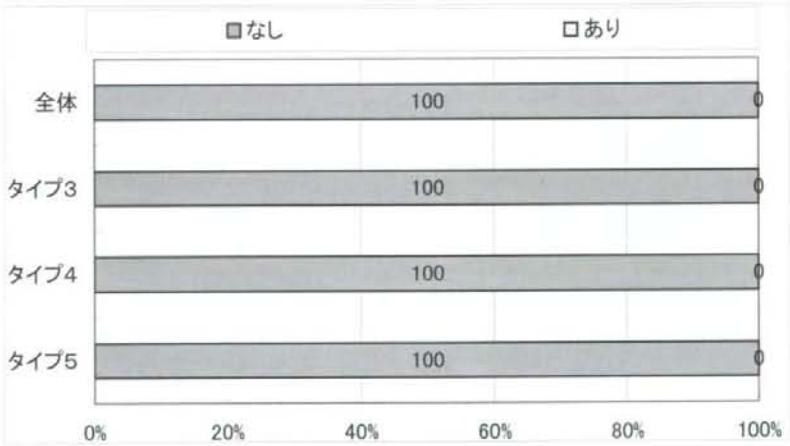

図 9- 30　10 分間以上の意思決定支援

⑰身体的な症状の訴え

身体的な症状の訴えについて、全体では、「なし」が 670 名（99.9%）、「あり」が 1 名（0.1%）、タイプ 3 では、「なし」が 35 名（100%）、「あり」が 0 名（0%）、タイプ 4 では、「なし」が 209 名（100%）、「あり」が 0 名（0%）、タイプ 5 では、「なし」が 426 名（99.8%）、「あり」が 1 名（0.2%）であった。症状の訴えはかなり少なく、タイプ 5 にわずかに示されただけであった。

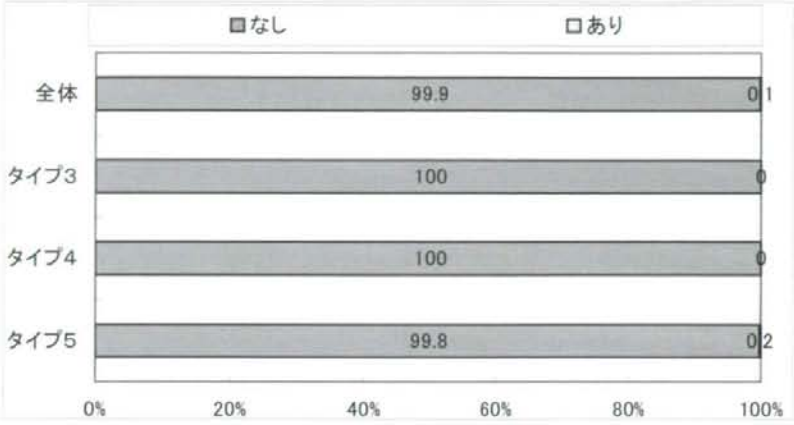

図 9- 31　身体的な症状の訴え

⑱退所予定

退院予定について、全体では、「なし」が 671 名（100%）、タイプ 3 では、「なし」が 35 名（100%）、タイプ 4 では、「なし」が 209 名（100%）、タイプ 5 では、「なし」が 427 名（100%）で、退所する予定の乳幼児はまったくいなかった。

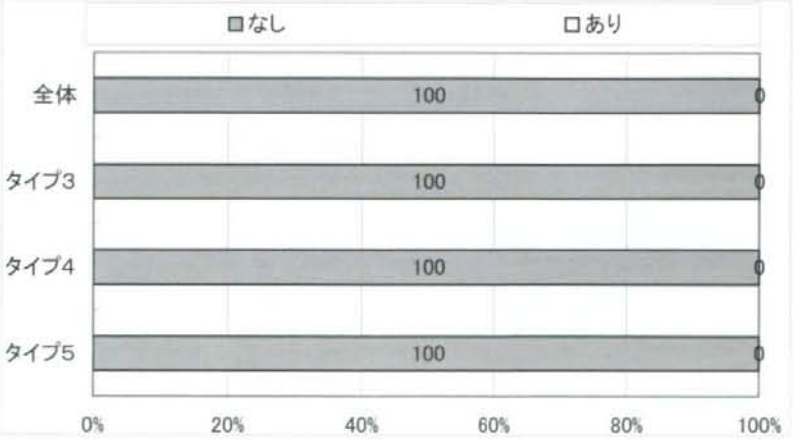

図 9- 32　退院予定